

「太平山麓九条の会」だより

事務局：須黒法律会計事務所 〒328-0027 栃木市今泉町 2-4-18 FAX0282-22-3757

電話連絡先 0282-22-7079(増田)

Eメール ochirasanroku9jo@yahoo.co.jp

HP：太平山麓九条の会で検索



171号

2021年9月24日発行

平和を守る憲法9条を生かす政治を！

少しずつコロナの感染数が減少しつつあるとはいえ、栃木県は緊急事態宣言中。まだまだ安心できる状況ではありません。そんな中なのに、野党が求めても国会は開かれず、自民党は総裁選に明け暮れています。マスコミも連日総裁選の報道で加熱しています。衆議院選挙前はわずかな期間とはいえ、自民党総裁が首相になるので当然という意見もありますが、こんなに報道する必要があるのかと思ってしまうます。



10月末か11月には衆議院選挙が行われます。私たち9条を守り生かしたいと思っている者にとって、どのような選択をするかが問われています。総裁選では、4候補の政策の違いなど、詳しく報道されていますが、改憲に対する態度は皆同じ。憲法を変えて戦争できる国にしようという主張は4人共通です。朝のテレビ番組で、法政大学前総長である田中優子さんは、「自民党の基本は、自民党が発表した自民党改憲草案に表れている。4人ともこの改憲草案の国家観を持っていることでは共通です。そのことをしっかり見極めて選択することが大切では？」などという趣旨の発言をしていました。

改憲草案を読んでも、「天皇は元首であり」と規定していますし、「家族は、社会の自然かつ基礎的な単位として、尊重される。」と表現していることから、個人の尊重より、家族主義の考えを持っていることが解ります。

一番問題なのは、自然災害において救助や復旧に力を尽くしている自衛隊のイメージを使って、戦争放棄を規定している9条を骨抜きにしようとしていることです。どんな選択をすれば、自分の望む暮らしや社会になるかをしっかり見極めて、選挙権は行使したいものです。

9条の役割を表現した看板



自民党改憲草案(9条改憲)の問題点

「集団的自衛権」を認めることが引き起こす危険を隠し、現在の9条が日本にもたらしている平和の恵みを帳消しにしようとしていること。自民党改憲草案は9条を改正して「集団的自衛権」を認めようとしています。しかし、「集団的自衛権」とは「自衛」という名前がついていますが、その中身は「軍事同盟」です。「集団的自衛権」を認めて他国と「軍事同盟」を結べば、第三国が地球の反対側で日本の同盟国に攻撃した場合でも、日本はその第三国に反撃することになります。そうすると、その第三国にとって日本は「敵国」となりますから、日本は、国際法上、直接、その第三国から攻撃されてもやむを得ないこととなるのです。

(自由人権協会の見解より)

9・19の日にプラカードや看板を掲げて、憲法9条の大切さをアピールしていますが、早乙女のり子さんがまた新しい看板を作成してくれました。「今、ここにある平和は9条が支えている」今の平和は、この言葉の通り9条で守られていると思います。しかし、時としてそのことを忘れがちでは？もう一度9条の果たしている役割をつかみ、守り生かす行動をしたいと思いました。

「わたしの戦中・戦後、そして今思うこと」

梅村貞子 記

小学校・国民学校初等科時代（昭和13年～18年）

わたしが、国とか戦争ということ意識したのは確か小学校3年生の時だったとおもいます。ある日の朝、お休みされた担任の先生に代わって教壇に立たれた教頭先生が黒板に「日独伊三国同盟」と書かれ「これからこの三つの国が助け合っていくので、強い日本がますます強くなっていきます」と話されたのです。それから1年後の12月8日の朝、日本の真珠湾攻撃と、米英との開戦の話に興奮しながら登校したのをよく覚えています。その年の4月から小学校は国民学校となって、わたしたちは小国民としての教育を受けるようになっていたのです。教科名が変わり国民科として、修身、国語、国史、地理が入りました。

国語の教科書の内容は、兵士の勇ましい話や、銃後の家族の美談が入り、作文の時間は戦地の兵隊さんへの慰問文をよく書きました。歴史では、天孫降臨の神話から万世一系の天皇を神としていただく日本の国はすばらしいと学び、わたしは日本人として生まれたことをとてもうれしく誇らしく思ったのです。鍛錬科は体操のほか5・6年生から武道が入り、男は木刀、女はなぎなたを振りました。芸能科の音楽では、敵の飛行機の爆音の聞き分け、工作は模型飛行機の組み立てに苦労したのをおぼえています。規律は共同責任で、特に級長に重い責任が課せられました。朝礼は組ごとの分列行進から始まります。「歩調取れ」「頭右」「直れ」と号令をかけるわたしは模範的な軍国少女になっていきました。次々と報じられる戦勝ニュースに胸躍らせ、アッツ島の全軍玉砕の報にその潔さをたたえました。



栃木高等女学校入学から終戦まで（昭和19年～20年8月）

昭和19年、栃木高等女学校に入学しました。入試は口頭試問と外で跳び箱や号令に合わせた歩行行動でした。憧れの白襟カバーの制服を、手作りモンペと作業服に変えて農家の手伝いに励みました。

4年生は6月から学徒動員で太田の中島飛行機工場へ。3年生は10月から学校工場で働きました。体育館を工場にし、町の神護工場から来た工員さんの指導を受けて、日の丸の鉢巻きをして凛々しく働く姿をわたしは憧れの眼で見つめていました。

空襲に備え、組ごとに防空壕をつくることになり、太平山の山頂付近の木が切り倒されて、その木を一人1本、担いで運びました。細かったり短かったりすると、もう一度戻らせられました。



食糧確保のため、農園はもとより、校庭の一部や、太平山の中腹を開墾してサツマイモの苗を植えました。うちには鍬がなく本当に困りました。そのころ家での苦い思い出があります。栃商生の兄が学校の勤めで少年航空兵か予科練かに志願しようとしたとき祖母が「お上から迎えが来てからでいいのだよ」と諭しました。それをわたしと姉で祖母をさんざん非国民呼ばわりしたのです。明治生まれで学もない祖母でしたが、真実の想いだったと思います。当時、祖母の末息子は2度目の召集を受けて南方へ出征していました。

19年の秋から空襲が始まりました。わたしはその年の大晦日の夜、東京で空襲に遭ってしまいました。姉の住んでいた下谷のアパートの2階に寝ていた深夜から元旦の早朝まで、3回の空襲でした。

最初は解除になった後布団に寝たのですが、2回目からは寒い中、アパートの入り口にうずくまり、周りの悲鳴や叫び声、焼夷弾の落ちる音におびえて朝を待ちました。後で調べたら偵察機1機ずつだったそうです。1機であるの怖さ、その後の数十機、百機、二百機・・・の怖さがどれほどかわかえがえ。20年になってからは、大都市は勿論、各地への空襲が始まりました。栃木の南の空を西へ向かうB29の編隊は白く輝きとてもきれいでした。軍需工場のある太田の街が何回も狙われたのです。夏のある日の空襲では花火のような音や光、落ちていく飛行機が見えたときは敵の飛行機だと喜びました。

そのうち、艦載機が東の方から低空で飛んできて、女学校の校庭のすぐ上を飛び、乗っている姿を見たこともあり。そんな空襲の帰り、残った爆弾を所かまわず落としていくのです。栃木の街中にも、新井の畑の中のお墓にも落ちて犠牲者も出ました。

7月12日には宇都宮がやられ、次は栃木だと噂しあいました。8月6日、広島に新型爆弾が落とされ、これから20年の間生物は生きられないそうだという話を聞きました。それでもわたしは本土決戦、一億玉砕、という言葉信じ、戦争が終わるなんて考えもしませんでした。

そして迎えた8月15日の昼、聞き取りにくい天皇陛下の放送を聞いたわたしは、しばらく空を見上げていました。その白っぽく煙った空と、その晩電灯の覆いはずした時の明るさは今でもありありと目に浮かびます。本当に戦争が終わったのだと家族と喜び合いました。

でもその直後は、進駐軍に奴隷にされるとか犯されるとかの噂におびえました。進駐軍が来て落ち着いてからは価値観の転換による戸惑いと混乱、敗戦による極度の貧困の中を夢中で過ごしました。そうした1年後の昭和21年の秋、新憲法が公布されたのです。

新憲法を学ぶ

わたしたちは新しくできた社会科で、その憲法を学びました。

粗末でしたが一人1冊の本が与えられ、前文から読み進めていきました。そこには、これまで見たこともない言葉と目指すものを説いた文章がありました。前文だけで感激した上に、3原則の「主権在民」「平和主義」「基本的人権尊重」を学んだときは、震えるような感動を覚えました。なにより、戦争放棄をうたった第9条があることで、もう日本は戦争をしない、平和でいられるのだと、心から安心したのです。



今思うこと・願い

満州事変の始まった年に生まれ、15年戦争とともに育ったわたしは女学校2年生の夏終戦を迎えたのち、敗戦後の苦しい暮らしを家族のおかげで何とか生き延びてこられました。そして卒業するまでの3年間、気持ちだけはのびのびと明るい民主的な学校生活を送ることができたのはとても幸せなことだったと思っています。なぜなら、戦後の学生生活を全く知らずに卒業された上級生はもちろん、戦争で命を失った方々、家族を失った方々が大勢いたのですから。

この方々の犠牲のおかげでいまの平安の生活があることを決して忘れてはならないと思います。この平和を何としても守り続けていかなければと、切に思い、切に願っています。

最後にひとこと

今、コロナ禍の渦中ですが、わたしは思うのです。爆弾は落ちてきません。食べるものは十分にあります。住む家もあります。戦争よりはいいですよ、と。



戦争関係のテレビ番組を視聴して

長嶋 康子記

昭和二十年三月十日、東京下町が空襲により焼き尽くされてから一か月半程後にムツソリーニが反政府非正規軍に捉えられて処刑され、遺体が冒瀝ぼうしやくされた。その四日後にヒットラーが自殺し、イタリアに続いてドイツも五月には全面降伏した。すると三国同盟を結んでいた二国が降伏したので、連合国軍と戦争しているのは日本だけになってしまった。日本も敗戦を自覚し降伏の決断をする絶好の機会であった筈。輜重しちゆうの観念など始めから持たぬ狂乱の指導者は「最後の一兵まで戦うべし。本土決戦止む無し」と声高に叫び皇国皇土を守れと国民、兵士に塗炭の苦しみを強いた。その時、狂気を諫める者は誰も居なかったのだろうか。天皇の意志だと言われて皆々ひれ伏したのだろうか。イタリアやドイツの様にレジスタンス運動を志す人は皆無だったのだろうか。報道者も大本営発表を信じて声にし文字にしたのだろうか。いや多分心中の疑問に蓋をしなければ官憲の目から逃げられなかったのかもしれない。「関口宏の近現代史」を毎週テレビに視聴し、それに関わる出版物などを読み、次兄がレイテ島で無残な死を遂げたらしい

ことと相まって、私の無念は煮え滾たぎっている。米兵は熱帯地方に進軍する前に、コップを手に並び感染症予防に一粒のキニーネを口に入れて貰って飲む。沖合には病院船が待機している。食料と軍事物資の輸送も事足りて。日本は戦艦は大方沈められ漁船を徴用しても海上は封鎖されて近付くことも出来ない。

然るべき時期に降伏を決断していたら後の二度の原爆投下を含めあれ程国民が壊れてしまうことから回避できただろうに。

アメリカ国民は今も、原爆を使ったから日本は降伏出来たのだと信じている人が居ると聞く。以前の私なら反発を覚えたが近頃ではあながちアメリカ人の自己弁護でもないなあと思うようになった。

(注) 輜重しちゆう＝軍隊で、前線に輸送、補給するべき兵糧、被服、武器、弾薬などの軍需品の総称のこと。



◆ 長嶋さんの文で少し触れているテレビ番組

BS1 スペシャル 「感染症に斃れた日本軍兵士」8月22日 日曜日 BS1 で放送
22時～前編 マラリア 知られざる日米の攻防
23時～後編 破傷風 ワクチン開発の闇



コロナ禍、感染症と戦争の関わりが注目されている。太平洋戦争で兵士の6割が餓死・戦病死だったという日本軍。感染症対策のため南方軍防疫給水部を組織した。最近その名簿が公開され知られざる活動が明らかになった。マラリア対策では特効薬キニーネを独占し米に優位に立っていた日本は、やがて苦境に追い込まれる。ワクチン開発では多くのインドネシア人が死亡する事件が起きた。南方軍防疫給水部の実態に新資料と証言で迫る。(語り 松重豊 担当 椿プロ 金本麻理子)

*インターネットで検索すると動画が見られます。

- ◆スタンディング 10月9日(土) 市役所前 10月19日(火) とちぎコープ前 午後4時～
- ◆スタッフ会議 10月7日(木)・10月22日(金) 市民交流センター 2階会議室 午後1時半～